

會 告

日本鐵鋼協會第十一回講演大會

開 會 期 日 日 程

十月十五日(日曜日) 研究部會	十月十八日(水曜日)	見 學
十月十六日(月曜日) 講演會	十月十九日(木曜日)	
十月十七日(火曜祭日)		

尙ほ詳細なるプログラムは決定次第追て掲載致します。

應 募 講 演 題 目 及 講 演 者 氏 名

- | | | | |
|---|---------------------------|-------|------------|
| 1. 電氣鐵鈹の製作に就て | 川崎造船所製鈹工場製鋼課技師 | 工 學 士 | 西山 彌太郎君 |
| | 薄鈹課技師 | 工 學 士 | 中 島 道 文君 |
| 2. 工具用特殊鑄鐵の豫備的研究 | 住友伸銅鋼管株式會社技師 | 理 學 士 | 絹 川 武 良 司君 |
| 3. 熔融狀態に於ける熔銑爐鑄滓の粘性に就て | 大阪帝國大學助教授 | 工 學 士 | 松 川 達 夫君 |
| 4. 鐵鋼及特殊鋼の高温硬度に就て | 東北帝國大學教授 | 工學博士 | 濱 住 松 二 郎君 |
| 5. 石灰窒素による鋼の表面硬化 | 東京工業大學教授 | 工學博士 | 山 田 良 之 助君 |
| | 助 手 | 工 學 士 | 横 山 均 二君 |
| | 津 上 製 作 所 員 | 工 學 士 | 江 川 朗 一君 |
| 6. 白銑鑄鐵の脫炭に就て | 戸畑鑄物株式會社冶金研究所 | 理 學 士 | 内 藤 逸 策君 |
| 7. 和鋼の製造に就て | 東京帝國大學名譽教授 | 工學博士 | 俵 國 一君 |
| 8. 電氣抵抗線用鐵合金の研究 | 東京帝國大學助教授 | 工學博士 | 三 島 德 七君 |
| 9. 窒素硬化に及ぼす Al, Cr, Mn, Ni の影響 | 三菱航空機株式會社名古屋製作所 | 工學博士 | 石 澤 命 知君 |
| 10. 鐵-セメント-硫化鐵合金の平衡狀態に及ぼす滿俺の影響
(滿俺に依る鋼の脫硫作用) | 東北帝國大學助教授 | 工 學 士 | 佐 藤 知 雄君 |
| 11. 鐵の磁氣的性質に及ぼす燐の影響に就て | 明治專門學校教授 | M. Sc | 嘉 村 平 八君 |
| 12. 銅を主成分とする銅-硅素-亞鉛系の平衡狀態に就て | 大阪帝國大學教授 | 工學博士 | 山 口 珪 次君 |
| | | 工 學 士 | 森 永 卓 一君 |
| 13. 鑄鐵の腐蝕現象(第一報) | 大阪帝國大學助教授 | 工 學 士 | 多 賀 谷 正 義君 |
| 14. シルクロム鋼の脆性原因に就いて | 東北帝國大學講師、大同電氣製鋼所囑託 | 工 學 士 | 錦 織 清 治君 |
| 15. オーステック不鏽鋼に就て | 日本ニッケル情報局技師、ドクトル・オブ・サイエンス | | 藤 原 唯 義君 |
| 16. 電孤銲接法に依る銲着鐵の電磁氣的性質に就いて | 大阪帝國大學講師 | 工 學 士 | 岡 田 實君 |
| 17. 鑄鐵の流電氣腐蝕に及ぼす成分並に組織の影響 | 株式會社新潟鐵工所技師 | 工 學 士 | 齋 藤 彌 平君 |
| 18. 非金屬チタンの鐵に及ぼす二三の影響に就いて | 東京帝國大學冶金學教室砂鐵研究室 | 工學博士 | 梅 津 七 藏君 |
| 19. 耐蝕アルミニウム合金合せ板に就いて | 古河電氣工業株式會社 | 工 學 士 | 鳥 羽 安 行君 |
| 20. X線に依る定量分析に就て | 東京帝國大學講師 | 工學博士 | 志 村 繁 隆君 |
| 21. 未 定 | 理化學研究所 | 工 學 士 | 黒 田 正 夫君 |
| 22. 電孤銲接棒被覆劑の二三の特性に就て | 鐵道大臣官房研究所 技師 | 工 學 士 | 柴 田 晴 彦君 |
| | 技手 | | 鯉 淵 正 夫君 |
| 23. 双物の切味に就ての二三の關係 | 東北帝國大學金屬材料研究所 | 理學博士 | 石 原 寅 次 郎君 |

「工 學 論 文 要 録」の 發 刊

「要録」見本御希望の本會々員に對しては部數 80 部を限り本會より無償配布致しますから至急日本鐵鋼協會宛御申込下さい。殘部多數あります。

八幡製鐵所製日本鐵鋼標準試料頒布

鐵鋼の標準試料が現代分析に従事する者に取りて貴重なる事は多言を要せざる所にして既に英米獨に於ても之を製作して汎く國內に頒布し之に依て分析の誤差を是正し且分析方法の可否を判定するの用に供せらる。然るに本邦に於ては未だ其企なかりし爲高價なる標準試料を海外よりの輸入に待てり。

八幡製鐵所は茲に見る所あり多大の犠牲を拂ひて之を作製し廣く官民分析所の便に供せんことを期し目下外國品に比し半額に足らざる廉價を以て之を頒布せらるることとなり特に其權威を保持せんが爲め鐵鋼學術並に技術の振興機關たる本會に對し其一手頒布權を分與せられたり。今其標準試料の特色を擧ぐれば

1. 最も周到なる注意と煩瑣なる手数を拂ひて完全なる平均試料を採取し且つ試料粒の均整を期したること
2. 分析方法は日本標準分析規格を採用し權威ある官民分析所 11ヶ所に依頼し各所別並に其平均分析を表示したる證明書を添附せること
其一例を示せば右表の如し
3. 試料壘は之を密封して酸化變質を防止し其外装紙筒には平均分析を記入せること（其外觀は寫眞に示す如し）
目下作製せられたる試料及價格は次の6種なるも今後他の試料をも順次作製せらるる豫定なり。

日本鐵鋼標準試料 分析成績

第四號 炭素鋼 (C=0.6% 鹽基性平爐鋼)

分析成分	炭素 C %	珪素 Si %	マンガン Mn %	燐 P %	硫黄 S %	銅 Cu %	ニッケル Ni %
標準値	0.61	0.039	0.73	0.023	0.023	0.12	0.028
分析者							
1	0.605	0.033	0.720	0.023	0.023	0.118	0.026
2	0.609	0.033	0.730	0.021	0.022	0.123	0.030
3	0.607	0.039	0.728	0.024	0.023	0.117	0.030
4	0.605	0.101	0.731	0.023	0.023	0.117	0.029
5	0.603	0.102	0.731	0.022	0.021	0.117	0.025
6	0.608	0.102	0.732	0.024	0.022	0.117	0.028
7	0.606	0.102	0.730	0.023	0.023	0.117	0.032
8	0.614	0.100	0.726	0.023	0.022	0.118	0.029
9	0.611	0.099	0.722	0.022	0.024	0.112	0.026
10	0.600	0.105	0.736	0.022	0.023	0.127	0.031
11	0.603	0.093	0.710	0.022	0.024	0.113	0.027
平均値	0.606	0.099	0.727	0.023	0.023	0.118	0.028

分析方法 日本標準規格鐵鋼分析方法

日本標準規格 第55號 鐵及鋼炭素分析方法 (昭和四年五月十三日 商工省告示第30號)

日本標準規格 第56號 鐵及鋼珪素分析方法 (昭和四年五月十三日 商工省告示第20號)

日本標準規格 第56號 鐵及鋼「マンガン」分析方法 (昭和六年十月六日 商工省告示第47號)

日本標準規格 第57號 鐵及鋼磷分析方法 (昭和六年十月六日 商工省告示第47號)

(硫黄、銅及「ニッケル」分析方法規格ハ追ッテ官報ニテ告示セラル、答ナリ)

分析者 (五十番順)

- 1 大阪工業試験所
- 2 海軍技術研究所
- 3 商工省鐵山局
- 4 製鐵所
- 5 鐵道大臣官房研究所
- 6 東京工業試験所
- 7 東京帝國大學工學部 (工業分析化學研究室)
- 8 東京帝國大學工學部 (冶金化學研究室)
- 9 三井鐵山株式會社目黒試験所
- 10 財團法人理化學研究所
- 11 陸軍科學研究所

昭和七年二月 製鐵所

品名	一壘の容量	價格	備考
第一號 C=0.1%	150瓦	8'00	代金の外に送料を要す。
第二號 C=0.2	150 "	8'00	
第三號 C=0.4	150 "	8'00	
第四號 C=0.6	150 "	8'00	
第五號 C=0.8	150 "	8'00	
第六號鼠銑鐵 C=2.8	150 "	10'00	



本會は常に相當の在庫品を準備してあるを以て各所の注文に應じ速に發送し得る用意有之候間何卒御注文あらんことを希望仕候